2019年12月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第515号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

第32回地方出版文化功労賞 特別賞 受賞

みんなで取り組んだ大阪の泉北ニュータウン再生のあゆみ
『ほっとかない郊外―ニュータウンを次世代につなぐ』

文／NPO法人・大阪公立大学共同出版会・理事長・八木孝司

本書の内容はその冒頭に明快に述べられている。「1965年に開発がはじまった、大阪府堺市の泉北ニュータウン。大阪都心部から約60分、緑豊かな郊外住宅地として人気を呼び、ピーク時の人口は16万人を超えた。だが町びらきから約半世紀を経た現在は約13万人。高齢化が進み、公的賃貸住宅のほぼ半分を占める府営住宅の空室率は約15％に及ぶ。人口減少、高齢化、空き家増加は、泉北ニュータウンに限らず高度経済成長期に開発された日本全国のニュータウンが共通して抱える課題だ。本書『ほっとかない郊外―ニュータウンを次世代につなぐ』は、住人そして地域内外のNPO法人、企業、大学、行政など多様な人々が、そんなニュータウンの状況を変えていこうと『ほっとけない精神』で取り組んできた、2010年以降のまちづくりを紹介する本である。」

【ほっとかない郊外―ニュータウンを次世代につなぐ】泉北ほっとかない郊外編集委員会著／大阪公立大学共同出版会刊／2017年10月発行・ISBN978-4-907209-76-6／本体価格1,900円

発端は、「高齢者が住む環境がない」

はじまりは、「高齢化しているのに『高齢者が住む環境がない』という泉北ニュータウン槙塚台住人の問題意識」であった。ニュータウンはどこも元々は徒歩圏内に近隣センターとよばれる商店、飲食店、医院などがあり、生活が完結できる構造であったが、今では店舗がどんどん撤退し、歩行が困難な人や車が運転できない高齢者にとっては住みづらい町になってしまった。そういう状況の中、2010年、槙塚台自治連合会、福祉系の法人、大阪市立大学の教員らによる町再生の取り組みがはじまった。彼らは「泉北ほっとけないネットワーク推進協議会」や「泉北ニュータウンリノベーション協議会」を立ち上げた。取り組みは多くの住民を巻き込み、住民たちの得意分野を生かして、自分たちの住みやすい町を作っていった。これらを押し進めたエネルギーは自発的で大阪らしい「ほっとけない精神」であった。これらの取り組みに対し、国交省、大阪府、堺市などの行政も「推進事業」や「モデル事業」等の数々の支援を行った。

本書は第1章「食卓ができた―槙塚台レストラン」、第2章「居場所ができた―いろいろな高齢者支援住宅」、第3章「健康になった―槙塚台の健康づくり」、第4章「楽しみができた―第3の居場所をつくる」、第5章「リノベができた―泉北スタイルでリノベーション」、第6章「役割ができた―ニュータウンに、自分の仕事をつくる」から構成され、それぞれの「はじまり」から取り組みの経過と、かかわった人たちがプロジェクトに込めた思いが紹介されている。

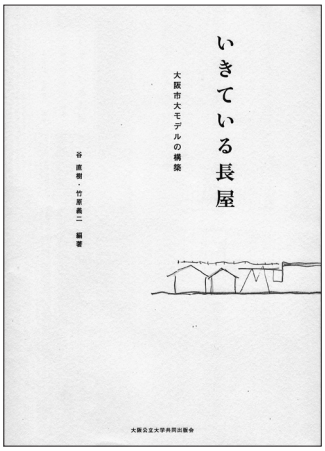
町づくりにかかわった人たちの多くが本づくりにも参加

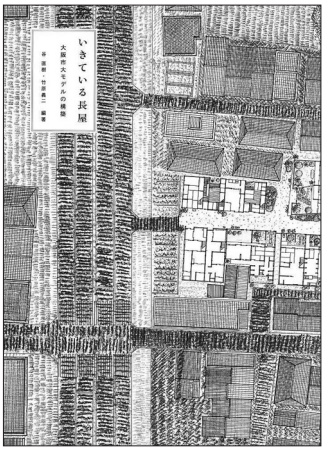
本書の特徴の1つは町づくりにかかわった人たちの多くが、その事柄について本文、写真、イラスト、コラム等にもかかわっていることである。町づくりにも本づくりにもリーダーシップを発揮されたのは大阪市立大学の建築学、住居学、栄養学などを専門とする教員で、そこに大阪府立大学や大阪経済大学のリハビリテーション学の教員、ニュータウン近隣のさまざまな法人の建築士、栄養士、ケアマネージャーなどが加わっている。大阪市立大学の多くの学生も授業の一環として町づくりにも本づくりにも加わっている。一般に町づくりの記録は地味で堅苦しい報告書ふうのものが多いが、本書はエピソードを多数まじえて、かかわった人たちがやさしいことばで自分たちがしてきたことを書いている。その中で専門家のコラムが、内容を引き締めており、そのバランスが絶妙である。また本書の表紙イラストや装丁の担当

者、編集者、印刷会社それぞれが実力をいかんなく発揮され、美しく、親しみやすく、読みやすい本にでき上がった。

本書出版のきっかけになった、もう1つの本『いきている長屋―大阪市大モデルの構築』

泉北ほっとかない郊外編集委員会から大阪公立大学共同出版会（以後弊会）に本書の出版の打診があったのは2017年1月頃である（発行は2017年10月5日）。本書を弊会が出版するきっかけとなったのは、弊会が出版し好評を博したもう1つの本にある。泉北ほっとかない郊外編集委員会のメンバーである小伊藤亜希子さん（大阪市立大学・教授・住居学）と小池志保子さん（大阪市立大学・准教授・建築設計学）は、大阪市の中心部、梅田近くにある大正時代から続く豊崎長屋（国の登録有形文化財）の再生プロジェクトに取り組まれた。このプロジェクトにも「ほっとけない精神」が発揮され、教員、学生、大家、住民、工務店が知恵を出し合い、6年がかりで伝統を引き継いだ長屋を再生させた。このプロジェクトのはじまりから完成までの経緯を、かかわった人たちの文章と写真で紹介した本が弊会から出版された『いきている長屋―大阪市大モデルの構築』（2013年3月27日発行 ISBN: 978-4907209032）である。このプロジェクトはさまざまな分野の団体から表彰され、本も2018年日本建築学会著作賞を受賞した。ぜひこの本もお読みいただきたいと思う。





【いきている長屋　大阪市大モデルの構築】谷直樹・竹原義二編著／大阪公立大学共同出版会・2013年3月刊／ISBN978-4-907209-03-2／本体価格2,500円
（右側は、表紙カバーをはずした状態）

弊会は、大阪の5公立大学すなわち大阪府立大学、大阪市立大学、大阪女子大学、大阪府立看護大学、大阪府立看護大学医療技術短期大学部を構成する教授を中心に2001年に設立された学術出版会である。府立の大学は2005年4月に大阪府立大学に統合されたので、弊会は大阪府立大学と大阪市立大学の教授を中心に構成されることになった。弊会は2006年に特定非営利活動法人（NPO）となり、両大学の教員のみならず、全国の大学教員および研究者の学術成果の発信を支援している。弊会は泉北ニュータウンのある堺市内の大阪府立大学中百舌鳥キャンパスに事務局を置いている。なお大阪府立大学と大阪市立大学は2022年4月に統合予定である。

＊

（やぎ　たかし／NPO法人・大阪公立大学共同出版会・理事長）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『食の歴史と病気そして未来』●荒川たまき著

本書は、アメリカの西部開拓史から話を始めるのだが、一般に知られた西部劇のそれではなく、牛肉食文明がどのように広がったか、を描写する「もう一つの西部開拓史」である。牛肉中心の食生活をしていた英国は、緯度が高く草が不足した土地であり、増大する牛肉需要に対応するため、アメリカの大平原への牧草侵略を開始した…時は過ぎ、今や世界中に広がったファストフード店に象徴されるような肉食中心の「豊かな生活」だが、肥満やガン、認知症や自己免疫疾患等に代表される健康被害への反省から、植物ベースのホールフードに着目する動きが世界中で起こっている。

本書はそんな実例の宝庫になっている。そこで語られるのは早期治療や早期発見ではなく、食事を中心とした予防医学に軸足を移すべきだ、という観点である。医療費削減が喫緊の課題であるはずの日本では、当たり前と言える議論であるが、なぜ現状は著者のいう通りになっていないのだろうか。これについて著者が提示するレポートには誰もが驚くだろう。この点で日本が政策的にも医学的にも欧米諸国の後塵を拝しているのには理由があるということがわかる。

ところで、本書は中盤に転調し、著者自身の脳梗塞体験が語られる。読者はここまで、書き手は医学者か医療ジャーナリストだと思って読んでいたのが、著者略歴に目を転ずると、実は著者は医療業界とは何の関連もないコンサルタント会社の経営者だったと初めて気づくのである。専門家を凌ぐほど医学や栄養学、あるいは食の歴史への造詣が深いことに改めて驚かされるが、著者は病で倒れるまで、野菜などろくに食べない忙しい生活を送っていたという。ということは自身が脳梗塞を体験した2015年から食事療法への関心を持ち始め、わずか数年で、本書に引用された膨大な知識を独力で獲得し、本書を書くに至ったのだ、ということに気づくのである。著者は1939年生まれ。驚くべき読書量と思考力には敬意を覚えずにはいられない。

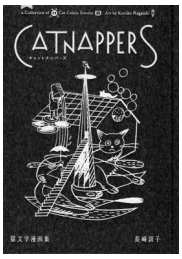
◆ 1600円・四六判・326頁・**サンライズ出版**・滋賀・201910刊・ISBN9784883256693

『鄙の御所　ー古河公方　足利成氏』●北見輝平著

小説の舞台は15世紀半ばの東国。鎌倉から下総古河に政庁を移した足利成氏が主人公。タイトルの「鄙」とは古河のこと。この頃の日本は、京都将軍家と関東足利氏との抗争が繰り返された時代。永享の乱で父持氏が敗死、その後に起こる結城合戦から物語は始まる。兄二人が殺害され一人残った幼少の成氏。やがて成人したかれは将軍家側である宿敵山内・扇谷両上杉氏（関東管領）と対峙することになる。「享徳の乱」を経て最後は「都鄙和睦」で物語は終わる。キーパーソンとなるのが、成氏の近習で奉公衆の野田持忠と簗田持助の二人。豪放磊落な持忠、冷静沈着な持助と対照的な性格に設定。残念なのは、多彩な人物が登場するためか視点が統一されていないこと。結果、印象が薄くなった感がある。一人あるいは二人に視点を絞れば…。例えば、持助の視点に立って物語が進行したならば、公方側近としての苦悶や葛藤など人間像もより深まり、さらにドラマ性が増しただろう。

◆ 1500円・四六判・250頁・**さきたま出版会**・埼玉・201910刊・ISBN9784878914669

『Ｃａｔｎａｐｐｅｒｓ　猫文学漫画集』●長崎訓子著



古今東西、猫が登場する文学作品はあまたあるが、猫たちは人間世界をいつも冷静に見つめているようだ。本書は『武士道シックスティーン』や『億男』などの装画を手がけてイラストレーターとして多方面で活躍する著者が文学作品をコミカライズした３作目の作品集。今回は猫くくりで、ルナールから始まり、別役実、芥川龍之介、中原昌也、筒井康隆、小川未明、サキ、赤川次郎から菅原孝標女「更級日記」まで多彩なジャンルを網羅した10編と、自らも猫好きな著者の表題作でオリジナル作品１編から成っている。時には愚かで身勝手な人間を主にモノクロで描かれた猫たちがさまざまな表情や仕種でシニカルに観察している。または死んでから猫になって家族の元へ帰ったり、夢に出てきて、その存在感を示してくれる。

猫好きはもちろん、そうでなくても上質の短編映画のようにバラエティに富んだ作品を目で楽しめて、不思議な猫の力を存分に味わえる漫画集。

◆ 1600円・Ａ５判・144頁・**ナナロク社**・東京・201909刊・ISBN9784904292907

『葉っぱは見えるが根っこは見えない』●高久多美男著

27歳の時に二間の借家の片隅で裸一貫、広告企画・デザイン会社を起業した著者は、30年来、病気で終日休んだことも、朝起きて「今日は嫌だな」と思ったことがないという。ワーカホリックだった訳ではない。休むのは終日遊ぶ時と心がけ、体が休みを求めていると感じればいつでも休み、社員を抱えて会社を経営し、それなりの収入を得てきた。どうしてそんなことが可能なのか。行きつけのカフェの店主に、仕事が楽しいと思ったことがないと語りかけられ、1）自分の仕事においてプロ徹する、2）リベラルアーツを学ぶ、3）強いてあげれば禅に学ぶと書いて渡す。未熟では楽しく仕事はできない。プロになるにはがむしゃらに働くことも必要であり、仕事が苦役だと感じるのは遊びと学びを放棄しているからだ、その三位一体の相乗効果を発揮して人生の質を高めるという主張に思わず膝を打つ。閉塞感漂う現今の社会での生き方に、大いなる示唆を与えてくれる思考法である。

◆ 1600円・四六判・339頁・**フーガブックス**・栃木・201901刊・ISBN9784902487336

『昭和３０～４０年代　北海道の鉄路』●星　良助著

今や見る影もありませんが、かつて北海道には多くの鉄道が存在しました。国鉄線のほかにも、多様な私鉄をはじめ、貨物専用鉄道や森林鉄道などが数多くありました。しかしそれらの多くは石炭産業の斜陽化とモータリゼーションの進展とともに姿を消していきます。本書に収められた写真は昭和30～40年代、SLも走り、北海道の鉄道の多くがまだ現役だった頃のものです。国鉄の写真も収録されていますが、本書には北海道の私鉄の写真が数多く収められているのが特徴といえるでしょう。定山渓鉄道のモダンな車両や、旭川電気軌道のコトコト走る小型車も、廃止から時がたった今では貴重な記録です。とりわけ貨物専用線や鉱山鉄道については非常に詳しく記録されています。残された資料が少ないこれらの鉄道も、機関車や客車・貨車などの姿が丹念に撮影されています。それらの車両の来歴も詳しく記載されており、鉄道ファンの方にも興味の尽きない写真集となっています。

◆ 2800円・Ｂ５判・432頁・**北海道新聞社**・北海道・201909刊・ISBN9784894539594

売行良好書

期間：2019年10月15日～11月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『もう一度　倫敦巴里』2200円・ナナロク社　(2)『明智光秀ゆかりの地を歩く』1500円・サンライズ出版　(3)『お砂糖とスパイスと爆発的な何か』1500円・書肆侃侃房　(4)『柳家喬太郎バラエティブック』1637円・東京かわら版　(5)『よみきかせのきほん』750円・東京子ども図書館　(6)『たぶの里』1200円・ナナロク社　(7)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房　(8)『石牟礼道子全歌集　海と空のあいだに』2600円・弦書房　(9)『駅から登る岡山の山１００座』1700円・吉備人出版　(10)『菜食主義者』2200円・クオン　(11)『難行苦行の<絵描き遍路>をやってみた』1700円・寿郎社　(12)『ちがうものをみている』1200円・石風社　(13)『自然治癒はハチミツから』2000円・鉱脈社

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］

(1)『柳家喬太郎バラエティブック』1637円・東京かわら版　(2)『昭和プロレスマガジン　５０』909円・昭和プロレス研究室　(3)『東京かわら版　１１月号』546円・東京かわら版　(4)『本の雑誌　４３８号』667円・本の雑誌社　(5)『たやすみなさい』2000円・書肆侃侃房　(6)『旅先銭湯　３』1200円・さいろ社　(7)『お砂糖とスパイスと爆発的な何か』1500円・書肆侃侃房　(8)『戦国民衆像の虚実』3000円・高志書院　(9)『顕正会破折Ｑ＆Ａ』318円・大日蓮出版　(10)『続・ニホンという滅び行く国に生まれた若い君たちへ』1500円・白馬社

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『たやすみなさい』2000円・書肆侃侃房　(2)『おきなわ懐かし写真館　復帰前へようこそ』1200円・琉球新報社　(3)『ウズベキスタン陶芸紀行』1500円・共同文化社　(4)『陣跡が伝える関ヶ原の戦い』2000円・垂井日之出印刷所　(5)『造山古墳と作山古墳』1500円・吉備人出版　(6)『街道でめぐる滋賀の歴史遺産』2400円・サンライズ出版　(7)『きんこん土佐日記　第１０巻』933円・高知新聞社　(8)『元服後の父　石田三成と津軽信建』1000円・北方新社　(9)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版　(10)『自然治癒はハチミツから』2000円・鉱脈社　(11)『駅から登る岡山の山１００座』1700円・吉備人出版

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

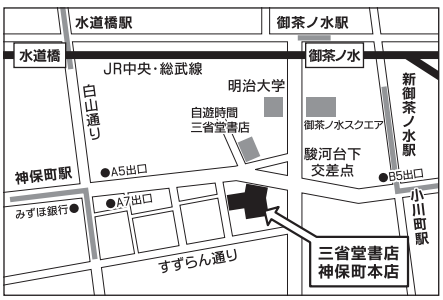
▼新潟県内在住者等の執筆による自費出版図書を顕彰することを目的とした**「新潟出版文化賞」**（新潟県主催）において本年、**【良寛－その人と書＜五合庵時代＞】**（小島正芳著考古堂書店刊 ISBN978-4-87499-867-0）が大賞を受賞されたということです。「…賞以前に、地道に真実を追い求め、ほんものの歴史、ほんものの風土、ほんものの表現を摑もうとする新潟人の気性といえばいいのか。根本には、この愛する新潟の土地に生き、自分があること、人々があることの、代えがたいありがたさを、どの作品からも感じられるのだ。大賞の小島正芳さん『良寛―その人と書〈五合庵時代〉』は、諸国行脚を終えた良寛の、越後に戻ってからの生き様を追った。綿密な資料渉猟、書における運筆の推移分析などもマニアックなほどの迫真性を披露し、何より読んでいて圧倒的に面白い。〈口に無声の詩を吟ず〉と良寛は遺したが、あたかも我らが良寛さんが、目の前で声を発し、笑い、泣き、息遣いさえ伝わってくるようなリアルさ。褪せた墨衣から良寛の体臭さえ感じられるほどで、多くの友との語らいや歌の交感を喜ぶ良寛の声が聞こえ、笑顔が見えてくるのだ。良寛研究第一人者の実力である。」（作家・藤沢周氏の総評より）

▼こちらも自費出版図書への顕彰を目的とした**第８回ふるさと自費出版大賞**（全国新聞社出版協議会主催）ですが、**【NO NUKES　ビキニの海は忘れない】**（岡村啓佐著高知新聞総合印刷刊 ISBN978-4-906910-80-9）が選ばれたとのことです。こちらの書籍は、以前弊誌2019年５月号１面で特集したことがありました。現在は弊社サイト「アクセスweb版バックナンバー」バナーから読むことができます。また同賞の文芸・創作部門に**【さすらひ人綺譚】**（神山奉子著下野新聞社刊 ISBN978-4-88286-707-4）が選ばれています。こちらは以前弊誌2018年９月号の新刊ダイジェストで取り上げられています。現在は弊社サイト新刊ダイジェストページで読むことができます。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

三省堂書店
BOOKS SANSEIDO

営業のごあんない

神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM ～ 8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。